

M20c

## 飛騨天文台ドームレス太陽望遠鏡と IRIS を用いた活動領域近傍における 小規模活動現象の分光観測

加藤友梨 (明星大学), 大辻賢一 (国立天文台), 北井礼三郎 (京都大学)

NASA の太陽観測衛星 IRIS(Interface Region Imaging Spectrograph) は 2013 年 6 月 28 日に打ち上げられ、高空間・高時間・高波長分解能による太陽遷移層の分光観測を行っている。本ポスターでは、IRIS と地上観測から得られたエラーマンボム等の小規模輝点の分光観測データの比較結果について発表する。

本観測は 2013 年 7 月 30 日に行われ、7 月 28 日から活発な磁束管浮上を見せていた活動領域 NOAA11805 を観測対象とした。エラーマンボムの同定には、飛騨天文台ドームレス太陽望遠鏡 (DST) の水平分光器による分光観測データを用いた。DST の水平分光器は多波長同時分光観測が可能であり、今回の観測波長として  $H\alpha$  6563Å、Ca II K 3934Å 及び Ca IR 8542Å が採用された。一方の IRIS では、C II 1336Å、Si IV 1403Å、O I 1356Å、2787Å、Mg II k 2796Å 及び Mg II h 2803Å による分光観測が実施された。DST の  $H\alpha + 2.0\text{Å}$  のスペクトロヘリオグラムからは、東西に分布する黒点間に明るい輝点が観測された。これらは  $H\alpha$  中心画像では目立った増光が見られず、またプロファイル形状からも典型的なエラーマンボムと判断された。また、DST の  $H\alpha + 2.0\text{Å}$  スペクトロヘリオグラムと IRIS の 2832Å スリットジョー画像との比較を行った結果、地上観測でエラーマンボムとして観測された輝点以外に、IRIS 画像上では数多くの小規模な増光が存在することが判明した。本ポスターではこれら 2 種類の輝点について、地上観測・衛星観測双方から得られた分光データの比較を行い、その成因についての考察を行う。また、エラーマンボムが彩層・遷移層に及ぼす影響についても議論を行う。